

アソンを実施。

DAY 2 (8月26日)

目標と現状のギャップをREASAS等のツールを活用しつつ分析。ブレイクスルーさせるためにどんなテクノロジーが必要かをアイデア出した。解決案を考察しアプリや工作などの手法で何らかのプロトタイプを制作の準備を進めた。

DAY 3 (8月28日) (協力：東灘区副区長、酒心館)

東灘副区長、酒心館さんも講評に参加し、アイデアの発表とディスカッションを行った。動画編集やデータ分析などを実践。

●生徒の感想 (抜粋)

- ・テクノロジーを社会に出ても ChatGPT などを自分のアイディアの足しとして新しい考えを出すのに活かそう
- ・将来建築関係の仕事につきたいと考えているのでそれに活かせると思う
- ・情報の分析能力が大学でも活かせると思いました。
- ・現状を分析し、あるべき姿になるための方法を探究する方法を学び、今後社会に出たとき幅広く役に立つと思う。
- ・高校の探究の授業、社会に出て問題に出くわした時に役に立つと思う。
- ・お酒という今まで関わったことない分野を学習して、自分たちの知らない分野のことでも深く調べれば解決策を見つけることが出来ると思いました。

【D コース 地震と防災】参加者 15名

●学びのポイント

学校と同じ名前をもつ「御影石」は、以前は近隣で採掘されていた世界で最も美しい花こう岩。日本列島が大陸に付いていた時代に造られたものだが、その後、列島が大陸から離れ六甲山ができるまでの地球史の中で、断層や激しい地震が発生した。御影石をもとに講義と実験を始めて、北淡震災記念公園の野島断層や石屋川公園のフィールドワークを行い、地震と防災のことについて考察する。

●3日間の連携 (講師：竹中敏浩 本校コーディネーター、兵庫県立人と自然の博物館研究員)

DAY 1 (8月1日)

(午前) 講義：地震の発生とその被害、観察：御影高校玄関の石材、実験・観察：水簾 (すいひ) による石屋川の砂の鉱物観察 (午後) 講義：花こう岩の成因、リニアメントと大断層、六甲山の成因と断層、野島断層、地震のメカニズム、東日本大震災と津波

DAY 2 (8月2日)

(午前) 見学：淡路SAから明石海峡大橋と六甲山、見学：北淡震災記念公園 (断層保存館・断層トレンチ・メモリアルハウス=震災当時の状況を保存した家屋)、(午後) 見学：うずの丘大鳴門峡記念館、うずしお科学館 (バス内での発表)：淡路島のトリビア

DAY 3 (8月3日)

(午前) 講義：宮水と神戸ウォーター、都賀川水難事故、見学：天井川としての石屋川の観察 (午後) 実験・観察：グランドの土は何からできているか水簾により調べる、講義：花こう岩の風化、六甲山の河川を世界の河川と比較する、宮水、六甲山周辺の水害と防災

●生徒の感想（抜粋）

- ・今回の学びでは実際に見てみたり行動したりすることの大きさがわかりました。これからの自主的な活動や探求での活動で自分から動くことができるようにしたいです。
- ・断層保存館で、“家族を守る”という文字を目にしました。阪神・淡路大震災と東日本大震災の映像が流れていて、より地震の怖さを体感した上で「家族をどうすれば守れるのか」ととても考えるようになりました。子供の自分にできることはあるのか、ネットで調べたり、本で調べたりすることが実際に災害にあった際には役に立つと思います。

【E コース 生物多様性】参加者 7名

●学びのポイント

2泊3日で佐津・柴山へ。日本海にてウニの人工受精をおこない、発生過程を観察。普段は山でのフィールドワークを主としている環境科学部と行動を共にすることによって、海と山のつながりについて深く考察することを目的とする。

●3日間の連携（講師：本校教諭 大西伸弥）

DAY 1（7月30日）

ウニの採集及び人工授精をおこなった。その後、ウニの発生の観察を行った。

DAY 2（7月31日）

ウニの発生の観察を引き続き行った。また、魚をはじめとする水生生物の採集を行い、その特徴や生態を観察した。さらに、瀬戸内海と日本海側における漁業の発展の違いや、地形の特徴などについて考察した。

DAY 3（8月1日）

ウニの発生の観察を引き続き行った。

●生徒の感想（抜粋）

- ・地球温暖化などの地球の環境問題をより念頭に置くようになり、ニュースなどに気を配り、社会の一員として看過できない問題として受け止めて日々考えていきたいです。そのような日常の考え方の部分で活かしていこうと思います。
- ・主体性や集団を束ねる力が今後のチームで協力する場面で生かせると考えています。
- ・海で起きている環境の変化を知ったことが今後の部活動での山の調査をする場面で活かせると思う。
- ・生物の観察法や顕微鏡の使い方は今後の生物基礎の授業や実験で活用できると思う。

【F コース 建築】参加者 15名

●学びのポイント

①廃屋再生②公共空間の再開発③模型制作ワークショップという多角的な視点で建築に触れ、また体感的に経験することで「ものづくり」の面白さや、社会課題に向き合いクリエイティブな視点で創造することに関心を持ってもらう。また建築というカテゴリーにおいても様々なキャリア軸を持った建築関係者がいることを知る機会をつくる。

●3日間の連携

DAY 1（8月4日）：（講師：合同会社廃屋 代表西村周治）

神戸市平野区梅村の廃屋群を集落毎再生し、ギャラリーやレジデンス、茶室等として新しい価値を創造している西村組に日本の空き家問題を学び、実際にバイソン（梅村地域の集落を再生したエリア）でコンクリート打ちを体験。

DAY 2（8月9日）：（講師：神戸市公園整備課他）

公共空間の再整備、再開発が進む神戸市の現在地を視察。東遊園地、こども本の森、三宮周辺再整備を軸に公共建築がもたらす暮らし方の変化を知り、いち市民としても公共空間への「問い」の視点を養った。

DAY 3（8月21日）：（講師：阿曾芙美建築設計事務所 代表阿曾芙美 他建築家5名）

神戸市灘区の建築家阿曾芙美氏によるワークショップ。御影高校校舎をフィールドワークし学校生活をよりよくする建築物のアイデアを発見し、原寸で模型制作を行う。テーブルファシリテーションに建築家5名も参加した。

●生徒の感想（抜粋）

- ・今すでにある物でも、どうしてこの形状になったのか、製作者はどんな思いで作ったのか、もっと良い物に変えられないか、と考えると新しい発見やアイデアに繋がるという学びが、建築に関わることになった時や建築に関係なくても会社で新しい発想が欲しい時などに活かせそうだと思います。
- ・あらゆる物に価値を見出す力・長所や魅力を複数の視点から見つけて、個人的な主観で決めつけないことに繋がると思います

③目標の達成状況、成果、評価（速報値より）

三菱 UFJ リサーチ&コンサルティングが作成した「高校魅力化評価システム」のアンケート項目より

- ・「将来国や地域の担い手として、積極的に政策決定に関わりたい」に当てはまると答える割合

	2023（目標値）	2022（目標値）	2021年度 ※事業前
全校生徒	42.0%（48%）	42.8%（45%）	44%
クリエイション講座参加生徒	90.1%（55%）	90.6%（50%）	

- ・「国際社会の課題解決に貢献したい」に当てはまると答える割合

	2023（目標値）	2022（目標値）	2021年度 ※事業前
全校生徒	56.4%（63%）	58.9%（60%）	68%
クリエイション講座参加生徒	98.4%（75%）	92.9%（70%）	

- ・「客観的な証拠に基づき、判断する科学的視点から課題解決にあたることができる」に当てはまると答える割合

	2023（目標値）	2022（目標値）	2021年度 ※事業前
全校生徒	47.7%（53%）	49.4%（50%）	50%
クリエイション講座参加生徒	93.4%（60%）	91.8%（55%）	

■本事業での目標指標、および、上記の結果に関する評価

計画書にも示したように、本事業については、様式が生徒の変容に関する評価となっているため、上記のような、生徒の変容の視点に関する成果目標を設定しており、「高校魅力化評価システム」のアンケートの中で、評価が低く、本校の課題であると認識できる3項目について、特色ある学びの先行実施を通じて、3年間の事業の実施によっていかに成果を上げることができるかを検証することとしている。

上記結果は、本事業の対象生徒とするべきところを「クリエイション講座に参加した生徒」と、「全校生徒」へのアンケート結果とを比較したものとなっている。特に、「クリエイション講座に参加した生徒」は、昨年度は172名、今年度は61名である。このうち、複数の講座に参加した生徒について、複数回回答した生徒の回答結果も含んでいるため、現在のところの速報値としている。なお、「全校生徒」の結果に関しては、昨年度は1学期末に実施した・2学期当初に実施したアンケート結果である。今年度と昨年度と通して、「全校生徒」の結果と比して、「クリエイション講座の受講者」は、3項目とも積極性が高いことが認められる。また、昨年度同様、アンケートの結果を詳しく検討したところ、クリエイション講座に参加した生徒が、もともとこのような回答ができるような生徒ばかりではなかったということもわかっており、クリエイション講座で展開された講義やワークショップ等を通じて、自分の持つ力を信じるようなことにつながったり、スキルが磨かれたりしたという結果が数値となって表れているものと考えられる。やはり、普段から開講されている「学校の中だけで展開される学び」ではなく、「学校外で開かれた学び」が、子どもたちの資質・能力の向上につながっているということであることが言える。事業としては、成功しているものと考えられるが、その一方で、この学びや積極性を全校生徒にどのように波及させられるかが課題である。文理探究科だけでなく、特に、探究的な学びを推進する「総合的な探究の時間」の充実が必要であることがうかがえる。また、同時に、次年度からは文理探究科への入学生全体を母数とする調査を実施し、学びの成果を検証していきたい。



兵庫県立御影高等学校
Hyogo Prefectural Mikage Senior High School



最新情報はWEBで公開中